特集●●●Feature articles

外国の音楽療法

音楽療法　世界事情

―米国に見るその歴史的発展、社会的環境、そして養成教育―

聖徳大学講師
古平孝子

はじめに

二〇〇二年七月、英国オックスフォード大学にて第十回音楽療法世界大会が開催された。これは三年に一度開かれるもので、今回は開催地のイギリスを含むEU圏のドイツ、フランス、スペインはもとより、デンマーク、ノルウェー、アメリカ、カナダ、ブラジル、アルゼンチン、南アフリカ、オーストラリア、韓国、日本など世界四十ヶ国以上から音楽療法士、あるいは医療・福祉・教育関係者たちが二五〇以上もの研究発表に参加した。ここでは文字通りの音楽療法・世界事情が議論されたわけである。

しかし、音楽療法の世界事情と言っても、簡単に語れるほど内容が統一されているわけではない。「音楽療法」という言葉からも推察可能なように、この分野は芸術、医療、福祉、心理、教育にまたがる学際的学問に加え、それらを支える各国の文化的背景、民族性、社会状況などにも深く関わりがあるため、当然のことながら、国の数だけ異なる音楽療法があり、さらには異なる音楽療法士が存在すると言っても過言ではない。

そこで、本稿では数ある音楽療法界の中でも先駆地的存在であり、筆者自身も一九九六年から、二〇〇二年春まで音楽療法士として生活していたアメリカに焦点を当ててみることとする。

歴史的背景

現在、おおよそ三八〇〇名以上の会員を率いる米国音楽療法協会（AMTA）はアメリカ合衆国の音楽療法を代表する団体であり、一九九八年に設立された。これは、それ以前に全国的組織として存在した全米音楽療法協会（NAMT, 一九五〇年設立）とアメリカ音楽療法協会（AAMT, 一九七一年前者より分裂）が合併したもので、米国に音楽療法が出現した第二次世界大戦後の四十年代から、約半世紀にわたって全米の音楽療法を支え、その発展に貢献してきたのだ。その半世紀を歴史的側面から簡単に振り返ってみよう。

英国の音楽療法士Bunt（一九九四）は、自身の著書の中で、二十世紀初頭には既に米国内において、病院を訪問し、患者たちに鎮静的音楽を提供する音楽家がいたという。また、栗林（二〇〇二）は、H.SeymourやW.Wallといった、後にこの時代の代表的な音楽療法士となった人々が、第一次、第二次世界大戦の間の時期に、精神病院や刑務所で音楽療法活動を行ったとしている。これらの活動をさらに発展させたのが第二次世界大戦終了後の米国医療当局による演奏家や音楽教師たちを病院のスタッフとして雇い、戦場から病院に送り込まれた帰還兵に対し、心身の傷を癒し、社会復帰のために音楽を提供させたことだった。その後、有名な精神科医メニンガー（Menninger, K.）を含む多くのセラピストが音楽の持つ治療的効果やその価値をはっきりと意識し、臨床の専門家としての音楽療法士養成カリキュラムを大学に設ける運動を行った。こうして一九四〇年代にはミシガン州立大学、カンザス大学などで音楽療法コースが開設され、

音楽療法士の養成が始まったのである。

この後、全米の大学内に音楽療法コースを設ける学部が次々に生まれた。各大学における教育内容は教官の音楽療法に対する考え方によって異なり、大きく分けると「行動心理学」をベースにしたアプローチをとる音楽療法コースを全米音楽療法協会が、そして、それとは対照的な「ヒューマニスティック心理学」を柱とした音楽療法教育をアメリカ音楽療法協会が支持する形となった。

冒頭で触れたように、この二つの組織が一つとなった現在では、各大学における考え方に相違はあったとしても、どの大学で学ぶかに関わらず、最低、学士コースを卒業していれば、AMTAが認定する音楽療法士の資格が取得可能になる。また、現在では、Post-Graduate（修士課程終了後）プログラムとして、即興を中心としたNordoff-Robbinsの創造的音楽療法、精神分析学に基づいたPriestley, M.の分析的音楽療法、そして音楽によるイメージ誘導法で深層心理と関わるBonny, H.のGIMなどのより深い知識や高度な技術を伴うセラピストを養成する教育機関もある。

音楽療法を取り巻く社会的状況

心理学第三勢力「ヒューマニスティック心理学」に属するロジャース（Rogers, C.）やマズロー（Maslow, A.）など世界有数の心理学者やセラピストを生み出してきたアメリカは、セラピー大国と思えるほど心理学においてその専門性が評価される環境にある。例えば、わが国でも昨今話題になっている臨床心理士の国家資格問題は、アメリカでは国家資格としての認識はもちろんのこと、博士号を持つ臨床心理士（あるいは心理療法士）は、精神科医と全く同レベルの職業であり、彼らが病院、施設、学校、あるいは個人開業をして患者に処方箋を書き与えることが認められているのだ。

そして音楽療法においても然りである。自身も音楽療法士であり、数年にわたってニューヨーク大学大学院にて音楽療法の修士課程クラスを教えていた岡崎（二〇〇〇）の調べによれば、その一つが医療保険の適用だ。例えば、アメリカの医療保険制度の中には、ケースマネージャーといわれる治療チームを管理する専門家（医師、ソーシャルワーカー、管理職セラピスト）などの承認を得れば、音楽療法の施療が保険によって一部まかなわれることがある。この際、CPT（Current Procedural Terminology）というコード・システムが使用され、音楽療法が保険適用される。

したがって、アメリカにおける音楽療法士の最もポピュラーな勤務場所が、高齢者を対象にした病院、施設である。これは、音楽療法士が治療チームの一メンバーとなることで、患者に治療費の他にセラピー代を負担させることなく医療専門家として治療に参加できるためだろう。

また、高齢者の他には、精神病患者、身体障害者、末期医療患者、不登校児、家庭内暴力や虐待を経験した人、健常者、そしてまだ記憶に新しい昨年九月十一日のアメリカ同時多発テロ事件で心に傷を負った人々など、広い対象で行われている。私事ではあるが、テロ事件当日は筆者もまだマンハッタンに住んでいたので、私自身がしばらくショックで外出できずにいた。その三日後の十四日、ニューヨーク市に住む音楽療法士の間で緊急E―メールを交換しあい、追悼集会が行われていたユニオン・スクエアでギター片手に大勢の

ニューヨーク大学大学院　卒業生演奏会　光景（上）
ノードフ=ロビンス音楽療法士養成コース 同期の仲間と恩師たち（下）
筆者 前列右端

人々と合唱したことは一生忘れることができない。

このように音楽療法が、自由の国アメリカでここまで広く深く発展してきたのは、その恵まれた歴史的・社会的土壌、いわばハード面だけが理由ではないだろう。ソフト面、つまり、この国に生きる人々の性質が多大なる貢献をしているのではなかろうか?

合衆国という名のとおり、この国はさまざまな人種、国民性、文化を持ち合わせた集団である。また、幼少時より、自分のアイデンティティーを追及することを強いられてきた人々でもある。そうでなければ、この広大な自由の国で埋もれてしまい、自分を見失ってしまうのかもしれない。

ニューヨークの街で、改めてそのようなことを感じる場所のひとつに本屋がある。日本の本屋と決定的に違うことは、Self-Improvement（自己改善・自己修養）のコーナーの大きさであろう。これは、いわゆる自分自身の欠点を改めることであったり、知識を得て人格を高めるといった意味だが、必ずしも物理的に資格を取ったり、学校に通ったりすることだけではない。この中には「自分とどのように向き合うか」、「老いとの付き合い方」、「自分探し」など、内面的な自己探求も含まれている。つまり幼少の頃からの内なる探求は年齢を重ねても続いているようだ。また、これはニューヨークという大都会ゆえか、健常者も当然のようにセラピーに通う。ハリウッドの映画を観ていると、主人公がカウンセリングやセラピーを受けている場面が時々出てくることに気づく。また、日ごろの友人同士の間でも、「貴方のセラピストはどこの誰か? 良い腕を持っているか?」などのような会話が当たり前のように聞こえてきたりする。それだけ、彼らは、各々が問題を抱え、まだまだ成長できる可能性があるものと認識し、公然とその問題に向き合う姿勢を表す。このような性質、「セラピーを受けたい」、「音楽療法を受けよう」、「自分を変えたい」という自らの成長に自分自身がまず気づき手を差し伸べてみること、がセラピー大国アメリカを作り上げたのかもしれない。

しかし、決してアメリカの音楽療法士、あるいは音楽療法そのもの全てが恵まれた環境のもとにいるというわけではない。私の勤めていたニューヨーク（ブルックリン地区）の子供施設の例を挙げてみよう。ここには軽度から重度にわたる就学前の発達遅滞児が通っており、彼らのほとんどが里親を持ち、また経済的にも恵まれているとは言いがたい環境に育つ子供である。この施設自体も非営利団体で、裕福な施設ではない。私が初めて仕事に就いた当時は、ピアノはもちろん、楽器もほとんどなく玩具のタンバリンやマラカスがいくつかあっただけである。クラス指導の先生たちは、私を「音楽の先生」と呼び、子供の障害のレベルに関係なく十五〜二十人といういわば音楽療法のセッションには無謀な人数相手に歌を歌うことが、私の仕事だと思い込んでいた。したがって、私の最初の仕事は彼らに、音楽療法とはなにか、ということを教育することから始まったのである。

このような状況は、今の日本の多くの施設や病院でも当てはまるのではないだろうか。音楽療法を知らない人間は、みんなで合唱をしたり、合奏演奏したりすること、それだけがセラピーだと考える。音楽療法のように二言で誰もが定義しにくい分野にはよくありがちな話である。しかし、自分の専門分野を何らかの理由で理解していない人々が職場にいるのであれば、彼らにデモンストレーションなり、講義なりをして、理解してもらえるよう努力をすれば良いだけの話である。少なくとも私の知る限り、アメリカ人音楽療法士の多くはこうして自分の目の前の道、そして後に続く道を切り拓いてきた。ここにも音楽療法の社会的環境・状況を整えるソフトの働きがあるのだ。

音楽療法士の養成教育

最後に、日本の音楽療法士養成にも参考になることを願い、アメリカでは大学側がどのような教育の後、音楽療法士たちを実社会に送り出しているのかを述べよう。

現在、前述AMTAに認可されている音楽療法コースを持つ大学は、米国五十州のうち三十二州にわたり七十三校あり、そのうち二十六校に修

士、および博士課程が設置されている（二〇〇三年一月七日 AMTA 調べより）。そのカリキュラムは各大学によりさまざまではあるが、筆者の卒業したニューヨーク大学大学院の場合、同大学院の他学科と比較して、通常の修士課程必要修了単位よりも、倍近い五十八単位を課せられる。これは、音楽療法の知識習得の他に、即興法、心理療法理論、そして臨床現場での極めて多くの実習（二〇〇〇時間以上）があるからだ。

このプログラムの中で、特筆すべきクラスは「音楽療法グループ」だ。これは、学生が実際にクライエントとなって音楽療法のグループセッションを受け、二年間に渡って必修とされている。ここでは即興的な音楽の使用がメインではあるが、言葉も使い、他のグループメンバーと自分との関わり、自分の役割、心の動きなど、それらと音楽がどのように関わっているか、自らが体験しそれらを記録することで、自分の内面や自分と他者との方向性など言葉では表しにくい内容を言語化する訓練をしている。

実は、このようなクラスは非常に珍しく、全米でも他に例を見ないだろう。冒頭で記した昨年のイギリスでの音楽療法世界大会でも、各国の大学関係者が集まり、このような学生自らが音楽療法の体験をするクラスの重要性が大きな話題となった。なぜなら、セラピストになる人間は、自分の内面に繊細で敏感なアンテナを必要とされるからである。

これに付け加え、音楽療法士に求められる資質のひとつに maturity（精神の成熟）がある。実は全米七十三校ある音楽療法コースのうち、学部コースがないのはニューヨーク大学だけである。つまり、ニューヨーク大学では大学院の修士・博士課程のみに音楽療法コースが存在する。これは、同大学院音楽療法コースの主任教授であるヘッサー教授（Hesser, B）が、セラピストとは人間の心を相手にする職業であり、個人の maturity が音楽療法士にとって必要な資質の重要項目と考えたため学部を閉鎖したのだ。すなわち、知識や技術などの習得云々の前に十代後半から二十代前半の人間に maturity を求めるのは難しいと判断した。セラピストはセッションの中でクライエントの人生に真剣に向きあわなければならない。つまり、セラピスト個人の人生、そして人生に対する姿勢が、セッションそのものに影響するため精神的に若い学部生には門戸が開かれていないのである。しかし、どれほどの優れたセラピストや教育者が養成を行ったところで、結局のところは学生自身の自分とのコミットメントによることを忘れてはならない。

おわりに

さて以上、音楽療法の世界事情ということで、今回は特にその道の先進国であるアメリカを例に挙げてみた。稿を終えるにあたって指摘しておきたいのは、本稿は決して「米国崇拝論」ではないということだ。確かに音楽療法を行うにあたって、その国の文化や国民性は切り離せないものである。多民族・異文化共存国家であるがゆえに、歴史、伝統、形式といったものに囚われない、アメリカ人独特の自由な発想や創造性が、この国の音楽療法の歴史を大きく発展させていき、世界有数の先進国にまでなったのかもしれないと思う。しかし、在り来たりの言葉ではあるが、私たちは人種や国民性を問う前に、一人の人間である。私たち日本人に血や涙があるように、彼らにもある。喜びもあれば悲しみもある。人間という同じ器の中に生きる私たちは、音楽という共通の道具を使って人間形成に役立てようとしている。それは昔も今も、そしてこれからも国境や時代を超えて行われることだろう。

引用・参考文献

※Bunt, Leslie.（1944）. Music Therapy-An art beyond words. New York : Routledge.（稲田雅美訳：音楽療法―ことばを超えた対話　ミネルヴァ書房　一九九六）

※岡崎香奈（二〇〇〇）「ニューヨーク大学大学院の助手から見たアメリカ音楽療法事情」（P.115 –117）、チャレンジ音楽療法士、音楽の友社

※栗林文雄（二〇〇二）「音楽療法の歴史」（p.19 – 32）日野原重明　監修　音楽療法入門（上）春秋社　二〇〇二